



International Symposium on Environmental Endocrine Disruptors 2000

Saturday, December 16 - Monday, December 18, 2000

講演者一覽

List of Speakers



ティオ コルボーン

WWF (世界自然保護基金) 科学顧問

WWF (世界自然保護基金) で野生生物および汚染物質プログラムを指揮している。多数の科学論文の出版、議会での証言、広範囲な講演活動、州政府、連邦政府、外国政府、および国際団体の顧問を行っている。1999年度レイチェル・カーソン賞 (ノルウェー)、および2000年度インターナショナル・ブルー・プラネット賞を受賞。ウィスコンシン大学マディソン校で動物学博士号 (疫学、毒性学、水化学を副専攻)、ウエスタン・ステート・カレッジ・オブ・コロラドで科学修士号 (淡水生態学)、ラトガース大学薬学部で薬学学士号を取得。

馳 浩

衆議院議員

自民党環境部会化学物質対策小委員会 委員長

1984年 専修大学文学部卒業。1984年星稜高校 国語教員。1984年ロサンゼルスオリンピックにおいて、レスリング選手として出場。1985年 プロレスラー、ラジオパーソナリティー、文筆業など多方面で活躍。1995年 参議院議員。日本体育大学女子短期大学非常勤講師。2000年より衆議院議員。

加藤 修一

参議院議員

内分泌攪乱化学物質 (環境ホルモン) 問題対策公明党・改革クラブ合同プロジェクトチーム座長、公明党ダイオキシン問題対策副本部長

1981年 北海道大学大学院地球環境科学研究科環境計画学専攻修了 博士号取得。北見工業大学 助手、(株)たくぎん総合調査研究部次長。1993年 小樽商科大学教授 (地球環境経済)。1995年 参議院議員、二十一世紀地球再生政策研究フォーラム代表幹事。

ゲーリー E. ティム

米国 環境保護庁 (EPA) 農薬・毒性物質予防室の学術協力・政策局 (OSCP) シニア・テクニカル・アドバイザー

1966年にルイジアナ州立大学にて生化学の学士号、1971年にミネソタ大学にて有機化学の理学修士号、1976年にハンフリー公共政策研究所にて修士号を取得。1973年に、自動車大気汚染統制局のテクニカル・アドバイザーとしてEPA入り、1978~1979年には、エネルギー局の仕事を担当。1979年には、EPAの毒性物質局に入り化学物質試験支局の班長、後には部門長も務める。1996年の食品品質保護及び飲料水安全法に基づいて、ヒトと野生生物の内分泌系を攪乱する可能性について化学物質をスクリーニングするプログラムの開発に助言を与える諮問委員会 (EDSTAC - the Endocrine Disruptor Screening and Testing Advisory Committee) のワークショップメンバーとサポート員を務める。また、化学物質の評価と協力に関する毒性プログラム省内委員会を始めとする各種の省内委員会および、3省庁による基金適用研究委員会においてEPAの代表を務めている。現在は、EDSTACの勧告を実施するEPA内分泌攪乱化学物質スクリーニングプログラムの共同管理者を務めている。主に、試験政策の開発、スクリーニングと試験のアッセイ法の有効性検証、スクリーニングにかける化学物質の選定と優先順位設定システム開発の責任的立場にある。

ビルジット ファン トンゲレン

EU 欧州委員会 環境総局 行政官

1983~1989年 ヘント州立大学獣医学科 (ベルギー)、1989年 獣医師免許取得、1989~1991年 英国在住、獣医科病院で外科助手、農漁食糧省の地域家畜検査官。ドーバー港に併設の家畜検査所にて、家畜の輸送の可否を、英国およびECの衛生規準に照らして検査。1992~1999年 ベルギー在住、獣医外科を個人開業、保健環境省 (家畜衛生試験所) 本部 (ブリュッセル) にて食品安全性 (食肉検査) に従事。2000年1月より欧州委員会 (ブリュッセル) 環境総局行政官、健康/環境問題に従事 (内分泌攪乱化学物質、ダイオキシン類など)。

クム スソク

韓国 環境庁 化学物質管理課 課長

1967年3月~1975年2月 高麗大学校 環境工学科、学士号取得、1990年3月~1993年8月 国立ソウル大学校大学院 公衆衛生学、修士号取得。1976年9月~1994年4月 保健福祉省、食品水衛生局員。1994年5月~1998年9月 環境庁、上・下水管理局員。1998年10月より現職。

上田 博三

環境庁 環境保健部 環境安全課長

1978年 大阪大学医学部卒業。同年 大阪府衛生部。1984年 厚生省児童家庭局母子衛生課課長補佐。厚生省業務局、宇宙開発事業団、厚生省生活衛生局、広島市衛生局長 (1992年)、厚生省健康政策局総務課医療技術情報推進室長 (1995年)、厚生省健康政策局医療関連サービス室長 (1997年) を経て、1998年 環境庁環境保健部環境リスク評価室長、1999年 環境庁環境保健部環境安全課長。

高杉 暹

横浜市教育委員会 委員長

1951年 東京大学理学部卒業、1952年~1960年 東京大学理学部助手、1959年 理学博士。1960年~1962年 カリフォルニア大学パークレー校 博士研究員、1962年~1970年 東京大学理学部講師、1970年~1973年 岡山大学理学部助教授、1973年~1978年 岡山大学理学部教授、1978年~1990年 横浜市立大学文理学部教授、1990年~1994年 横浜市立大学学長、1994年 横浜市立大学名誉教授、1997年より横浜市教育委員会委員長。1976年 日本動物学会賞 (周生期ホルモンの持続効果に関する研究)。

田辺 信介

愛媛大学 沿岸環境科学研究センター (CMES) 教授

1975年 愛媛大学大学院農学研究科修士課程修了。1977年 愛媛大学農学部助手。1985年 農学博士 (名古屋大学)。1988年 愛媛大学農学部助教授。1995年 愛媛大学農学部教授。1999年より愛媛大学沿岸環境科学研究センター教授。1985年 日本海洋学会岡田賞受賞。1999年 日産科学賞受賞。2000年 ISI引用最高栄誉賞 (環境分野) 受賞。

ジョン A. マクラ克蘭

米国 チューレン大学／ザビエル大学 生物環境研究センター
所長、ウェザーヘッド財団 環境学名誉教授

ウェザーヘッド財団 環境学名誉教授、チューレン大学薬理学教授、チューレン大学／ザビエル大学生物環境研究センター（ニューオリンズ）所長である。30年にわたりホルモン様活性を持つ環境化学物質の研究を続けており、このテーマの論文を150本以上公表している。1979年に環境ホルモンに関する初めての会議である「環境内のエストロゲン類」を主催した。所長を務める研究センターは、日米の研究者間の情報交換に積極的に関わっている。研究センターは、環境ホルモンに関する最近2回の日米共同サマールワークショップ、および2回の国際シンポジウムを支援している。しばしば来日している。

堤 治

東京大学医学部 教授、東京大学医学部附属病院女性外科科長、
科学技術財団CREST「内分泌攪乱物質」研究員

1976年 東京大学医学部医学科卒業、1983年 医学博士の学位授与（東京大学）、1985～1987年 米国NIH Laboratory of Molecular and Cellular Biologyへ留学、1992～1994年 東京大学医学部附属病院講師、病棟医長、1994～1999年 東京大学医学部附属病院助教授、1999年より現職。1993年 日本内分泌学会学術奨励賞、東京都医師会研究奨励賞を受賞。主な研究領域は、環境ホルモンの生殖機能への影響、子宮内膜症の診断・治療、婦人科領域の腹腔鏡下手術、不妊症の基礎的臨床的研究、細胞増殖因子特にEGFの生殖生理、性分化異常の基礎と臨床。

アンジェリナ ジョイ セリオ ダガン

米国 農業工業会 科学政策部長

ヒトの健康問題と内分泌攪乱のリスク評価に関して、農業産業界を代表する立場にある。前職はFMC社の農産物グループの国際登録・開発マネージャー。FMC社では新しい農業化学製品の開発を行うマネージャーとして、またメルク社、スミスクライン・ビーチャム社、ホフマン・ラ・ロシュ社では製薬産業のプロセス研究化学者として勤務。博士は、ラトガーズ大学から有機化学で博士号を取得し、コーネル大学において天然物質の合成と分離の分野でNIHのポストドクター・フェローシップを修了した。また、Phi Beta KappaおよびSigma Xiの会員でもあり、専門的業績には、18本の論文と4つの特許がある。博士は、内分泌攪乱化学物質のスクリーニングとテストに関する諮問委員会（EDSTAC-the Endocrine Disruptor Screening and Testing Advisory Committee）において産業界の代表を務め、EDSTAC最終報告書の執筆も分担した。現在は、EPAなどの関係者とともに、内分泌攪乱化学物質のスクリーニングと試験の優先順位付けと有効性検証の作業に携わっている。

関沢 純

国立医薬品食品衛生研究所 化学物質情報第一室 室長

東京大学大学院博士課程農芸化学専攻修了。農学博士。東京都公害研究所、ニューヨーク州立大学、会社研究所を経て1982年より現職。国際化学物質安全性計画のリスク評価事業を分担、トリフェニル錫、フタル酸ジエチルほかについて国際簡潔評価文書を作成。「農薬安全性評価データ集」第二版（1997）LIC社、「ダイオキシンと環境ホルモン」（1998）東京化学同人を監修、「リスクコミュニケーション－前進への提言」（1997）米国NRCを監訳など。

井口 泰泉

岡崎国立共同研究機構 統合バイオサイエンスセンター 教授

1974年 岡山大学理学部卒、1976年 岡山大学大学院理学研究科修士課程修了（理学修士）、1981年 東京大学理学博士、1981年～1983年 カリフォルニア大学バークレー校癌研究施設、動物学教室博士研究員、1987年～1991年 横浜市立大学文理学部助教授、1992年～1995年 横浜市立大学文理学部教授、1995年～2000年 横浜市立大学理学部教授（学部改組）、2000年 岡崎国立共同研究機構統合バイオサイエンスセンター教授。環境庁、建設省、労働省、科学技術庁、運輸省等の委員。研究分野は内分泌学。周生期のマウス生殖器官を用いてエストロゲンによる細胞増殖・発ガン・細胞死機構の研究や魚類を用いた環境ホルモンの発生分化に対する影響などについてを研究。

ルイス J. ジレット Jr.

米国 フロリダ大学 動物学教授

フロリダ大学の動物学教授であり、Distinguished Alumni Professorに選ばれている。1981年にコロラド大学（コロラド州ボルダー）にて生殖生物学で博士号を取得。フロリダ大学では、教師・研究者として賞を受けている。ジレット博士は、胚発生期におけるホルモンの影響に関する研究でよく知られている。また、さまざまな野生動物の胚発生期における内分泌攪乱汚染物質の働きについても研究している。現在は、最近使用されている農薬や旧来の農薬による混合化学物質に対し低濃度で胚が曝露した場合の影響や、富栄養化した生態系に遍在する化学物質の内分泌攪乱作用について研究している。

ヒョン セオ チョ

韓国 国立麗水大学校 助教授

1982年 国立水産大学校（釜山）にて学士号取得、1984年 国立水産大学校（釜山）にて修士号取得、主な分野：重金属汚染。1993年 大阪大学 学位論文：「有害金属類への環境曝露の定量的リスク分析に基づいた評価」にて博士号取得。卒業後1987～1989年 国立麗水大学校 研究助手、1993～1999年 国立麗水大学校 助手、1995～1996年 国立環境研究所（日本） 客員研究員、1999年より現職。主な研究分野は、海洋生態系における有機スズなど有害化学物質の汚染、運命モデル作成、リスク評価。

有蘭 幸司

熊本県立大学 環境共生学部 教授

1979年 長崎大学大学院薬学研究科修士過程終了。1986年 薬学博士（九州大学）。1999年より熊本県立大学環境共生学部食品安全性学講座教授。専門分野：環境毒性学、食品安全性学、衛生化学。

スーサン ジョブリング

英国 ブルネル大学 生物学部 研究講師

1991年10月 理学士優等学位 (2:1) 動物学 海洋動物学 (ウェールズ大学)、1995年3月 博士号「環境中のエストロゲン様化学物質と、それによる雄ニジマスの性発達への影響」(ブルネル大学)。1995年4月~1999年11月 ポストドクター研究員 (ブルネル大学)、1999年11月より研究講師。初期の研究論文は、*in vitro*および(アルキルフェノールの場合) *in vivo*での魚類における環境中汚染物質2グループ(アルキルフェノールポリエトキシレート類とフタル酸類)エストロゲン様の活性についてであった。その知見により、淡水および陸上の環境でのこれらの物質の存在に対する懸念が強まった。続いて、広範囲の脊椎動物による*in vitro*実験系を用いて、これらの物質にホルモン様活性があることをその他の脊椎動物種(哺乳類を含む)において確認し、内分泌攪乱化学物質の意義についての主張を、より広い視野に立って行った。現在は、*in vitro*での分子あるいは細胞研究や*in vivo*での室内研究よりも、野生の魚類個体群に研究の中心を置いている。最新の論文においては、野生魚における広範囲の性攪乱現象(下水排水への曝露による)を示し、そのような影響がいつ、どのような濃度の排水で起こりうるかといった事実の確定を試みている。現在は、野生魚の個体および個体群の両方における性攪乱現象の原因と結果を解明する研究に取り組んでいる。18本の論文の著作及び共同著作がある。

カレン クリスティアーヌ ヘルビング

カナダ ヴィクトリア大学 生化学・微生物学部 助教授

カナダのウィンザー大学にて1988年に生物学で科学学士号、ウエスタン・オンタリオ大学にて動物学で博士号を取得し、両生生物の変態における分子制御を研究する。1993年、カルガリー大学のランダール・ジョンストン博士の下で癌研究分野においてポストドク研究を進めた。1999年、ヴィクトリア大学で生化学の助教授となる。NSERC優秀大学教授賞を含む多数の賞を受賞。研究は、両生生物の変態における細胞周期レギュレーターの役割と内分泌攪乱を判定するための両生動物インジケータの利用に焦点を置いている。

ジョン P. ギージー

米国 ミシガン州立大学 動物学 特別教授、国立食品毒性学センター所属

ミシガン州アルマのアルマ大学を1970年に優秀な成績で卒業し、生物学の学士号を取得した。1971年には、ミシガン州立大学で湖沼学の修士号を取得し、1974年には同大学から博士号も取得している。1974年から1981年までの間、サバンナ・リバー生態学研究所に在籍するとともに、ジョージア大学生態学研究所および同大学動物学にも所属していた。博士はこれまでに、金属種分化および、多種毒性試験、水生生物におけるストレスの生化学的指標、多環式芳香族炭化水素の運命と作用、有機化合物毒性の光による増強作用に関して大量の研究を行ってきた。五大湖地域に生息する魚類、魚類を食する鳥類および哺乳類に関して、有機化合物の毒性および繁殖に及ぼす影響を積極的に研究しており、特にミンクワ猛禽(タカ、ワシなど)に強い関心を持っている。特に、北米五大湖地域において汚染堆積物の毒性を評価する方法の開発・応用の分野で積極的に活動している。博士は、4冊の成書を著し、6冊の書籍の編集を行っている。そのうちの、"Microcosms in Ecological Research and Sediments (生態学研究と堆積物の小宇宙)"と"The Chemistry and Toxicology of In-Place Pollutants (埋没汚染物質の化学と毒性学)"の2冊は伝統書になっている。米国環境保護庁(EPA)科学顧問委員会の委員および、米国科学アカデミーでは内分泌攪乱化学物質やPCB汚染堆積物改善に関する委員会などの4つの委員会にもメンバーとして参加している。1992~1993年には、Society of Environmental Toxicology and Chemistry Foundation for Environmental Educationの環境教育基金の理事長を務め、現在は副会長を務めている。

ピーター マティセン

英国 漁業水産養殖学センター (CEFAS) Environmental Quality室長

博士は生態毒性学者であり、英国の漁業水産養殖学センター(CEFAS)の環境質担当室長である。水系環境毒性学の分野に25年以上の経験を有し、1988年以降は内分泌攪乱化学物質の研究に携わっている。最近では、英国の海洋環境におけるエストロゲン様およびアンドロゲン様物質の存在とその作用について中心に研究を行っており、海洋および河口域の生物の生殖過程と個体群生存が汚染物質によって阻害される可能性を調査することを目的とした、政府と産業界の資金による大規模な研究プログラム(EDMAR)のプロジェクトの責任者を務めている。

紫芝 良昌

虎ノ門病院 分院長

1959年3月 東京大学医学部医学科卒業、1965年7月 カリフォルニア大学ロスアンゼルス校 Research Endocrinologist、1968年9月 虎ノ門病院内分泌科医員、1973年8月 虎ノ門病院内分泌学科及び内分泌検査部部長、1984年10月 米国NIH客員研究員、1986年9月 虎ノ門病院内分泌代謝科部長、1992年4月 虎ノ門病院分院長及び内科総合診療科部長、1994年10月 日本学術会議第7部内分泌研究連絡会議委員、1997年4月 虎ノ門病院副委員長兼務、1997年6月 第70回日本内分泌学会年次学術総会会長、1999年11月 日本甲状腺学会理事長、2000年4月 虎ノ門病院分院長、現在にいたる。受賞歴：1978年6月 日本内分泌学会甲状腺分科会七条賞、1980年2月 国際甲状腺学会大塚賞、1992年10月 日本内分泌学会甲状腺分科会三宅賞。

ウォルター J. ローガン

米国 国立環境保健科学研究所 (NIEHS) 疫学者

カリフォルニア大学サンフランシスコ校で医師資格を、カリフォルニア大学バークレー校で公衆衛生学修士 (MPH) を取得した。1976年に国立環境保健科学研究所 (NIEHS) に入り、1986~1991年には疫学課長、1993~1997年には臨床部長代理を務めた。Institute for Scientific Informationのリストによると、2000年秋の時点で博士の論文数は78、引用数は967である。ローガン博士の研究分野は環境内化学物質と小児の成長・発達であり、ノースカロライナ州におけるPCB類およびDDEへの背景曝露、メキシコにおける高度曝露が乳汁分泌に及ぼす影響、台湾におけるPCB中毒事例、幼児の認知発達の鉛による障害を予防するための経口キレート剤療法の臨床試験などに携わっている。

エルンスト ルドルフ ベルスマ

オランダ グロニンゲン大学、グロニンゲン大学病院 教授

小児科医として30年以上にわたり、オランダ国内および国際的な場で臨床、研究、教育に携わってきた。現在は、グロニンゲン大学の小児科と産科に所属し、ヒト栄養学の教授を務めている。特に、アラル海地域 (ウズベキスタン) で活動的な調査を行うなど発展途上国の母子栄養に関心を持っている。その他には、新生児学および周産期栄養学の臨床的側面 (疫学、病因学、臨床病理学、病態生理学、症候学、実験研究、管理と予防) を研究の対象としている。研究活動は、専門家の間でも評価される100本以上の論文に結実している。その内容としては、母体と周産期の栄養と代謝およびそれによる出生児への影響、(下限域の) 栄養が妊娠転帰と乳汁分泌に及ぼす影響に主眼を置いた周産期医療、環境中の毒性化学物質への周産期曝露およびそれが小児の長期の成長と神経発達に及ぼす影響、母子健康の通文化的側面などがある。教育での活動としては、母子医療に携わる医療従事者の全構成員にわたっている。また、世界中で設けられている大学院生によるワークショップの組織化に長い間携わっている。その他には、オランダや国際的な数多くの組織のメンバーに加わったり、コンサルタント業務にも携わっている。

パベル ランゲル

スロバキア 科学アカデミー 実験内分泌学研究所 教授

植物中の新たな甲状腺腫誘発物質の探索、分析、代謝、地方病性甲状腺腫と関連する甲状腺攪乱作用を主な研究分野とした。のちに、脳下垂体-甲状腺系に対する短期的影響 (ストレス、神経伝達物質操作、交感神経節切除術など) および糖代謝とT4-T3変換との相互関係を研究。最近では、思春期における甲状腺障害の非顕性徴候の疫学、有機塩素系物質の甲状腺攪乱作用と一般的毒性作用に関心を持っている。米国 (オレゴン保健科学大学-ポートランド)、日本 (群馬大学-群馬県前橋市)、ヨーロッパへ客員専門家としてたびたび招かれ、第7回国際甲状腺会議 (ボストン、1975年) では副議長を務めた。

ユエリャン レオン グオ

台湾 成功大学医科大学 環境衛生/労働衛生学部 教授

1982年 国立台湾大学医学部 医学博士、1983年 ハーバード大学公衆衛生大学院 修士、1987年 ジョンズ・ホプキンス大学、衛生/公衆衛生学校、環境衛生科学部 博士号、1986~1989年 テキサス州ラボック、テキサス工科大学保健科学センター、内科研修、1989~1990年 カリフォルニア州サンフランシスコ、カリフォルニア大学、労働医学特別研究員。1999年より成功大学医科大学環境衛生/労働衛生学部教授、成功大学病院労働医学部長、1996年より日本産業衛生学会 (Japan Society for Occupational Health)、会員、編集評価委員。台湾環境職業医学学会、代表。

パオロ モカレッリ

イタリア ミラノ大学ピッコカ校医学部 臨床生化学科教授、デシオ病院臨床検査医学部門ディレクター

1976年のダイオキシン (TCDD) 汚染事故後のセブソ地域住民の健康を追跡調査している臨床検査研究のコーディネーター。ヒトに対するダイオキシンの影響に関するWHOの専門家。多くの国際的学術誌に140を超える論文を発表。イタリア臨床生化学・臨床分子生物学会の1995年の会長。1999年には1000人以上の専門家が集まった「第19回 環境内ハロゲン化有機汚染物質に関する国際シンポジウム」の会長を務めた。

松尾 昌季

住友化学工業株式会社 研究主幹、大阪大学先端センター教授

1965年3月東京大学大学院化学系研究科博士課程修了。1965年4月住友化学工業株式会社入社。1984年3月主席研究員、1996年1月より研究主幹。また、1997年4月より大阪大学先端センター教授。1974年8月から1977年7月まで米国ニュージャージー州立大学ラトガー校に主任研究員として在籍した。出版物に「Environ. Health Criteria 133」(WHO IPCS, 1992共著)、「Ecological Issues & Environ. Impact Assessment」(Gulf Publ. Co., 1997共著)、「QSAR手法を用いた化学物質の手計算による毒性予測」(エルアイシー、1997)、「QSAR手法を用いた化学物質の手計算による生態毒性予測」(エルアイシー、1999) がある。

トーマス H. ハッチンソン

英国 アストラゼネカ社 ブリクスハム環境研究所 上席研究員

1986年 理学士号取得 (ロンドン大学キングズカレッジ校 環境科学)、1996年 博士号取得 (プリマス大学 海洋生物学)。1986年よりブリクスハム環境研究所に在籍し、医薬品、農薬、産業化学物質、処理排水の生態毒性学と生態系リスク評価に従事してきた。淡水の魚類・無脊椎動物・藻類の水圏毒性学、海生無脊椎動物を用いた遺伝子毒性バイオアッセイ法の開発、海生魚類の免疫毒性の評価などを専門とする。また、室内の研究活動に加えて、カリブ海や北海における野外調査の指揮も行っている。現在は、水生生物における内分泌攪乱現象の試験法の開発を中心に活動しており、生殖健康と生態系のリスク評価に重点を置いている。米国化学協議会、欧州化学工業協会 (CEFIC-EMSG)、OECD内分泌攪乱化学物質ワーキンググループなどの複数の国際的な生態毒性学活動に加わっている。また、専門家間で評判の高い論文と成書分担章を35本著しており、技術的な研究報告も70本に及ぶ。



横田 弘文

財団法人化学物質評価研究機構 久留米事業所

1991～1993年 広島大学大学院生物圏科学研究科 博士課程前期。
1998年～現在 九州大学大学院生物資源環境科学研究科 博士後期
過程在学中。1993年より、財団法人 化学物質評価研究機構。専
門分野：生態毒性学。

菅野 純

国立医薬品食品衛生研究所 安全性生物試験研究センター
毒性部 室長

1981年東京医科歯科大学医学部医学科卒業。1985年東京医科歯科
大学大学院医学研究科博士課程修了、人体病理学、実験病理学を
専攻。1986年より東京医科歯科大学医学部病理学第二講座助手。
1991～1993年NIH客員研究員（実験病理学）として研究に従事。
1995年より東京医科歯科大学医学部感染免疫病理学講座文部教官
講師。1997年より国立医薬品食品衛生研究所・毒性部室長に就任。
おもに内分泌に関連した分子毒性学的研究に力を入れている。実
験法に関連しては、OECDによる子宮肥大試験バリエーションプ
ロジェクトのリードラボラトリーの実務面をうけもっている。

ポール マシュー デイビッド フォスター

米国 化学工業毒性学研究所 (CIIT) 研究プログラムディレクター

現在、ノースカロライナ州 リサーチ・トライアングル・パーク
にある化学工業毒性学研究所の内分泌・生殖・発生毒性研究プ
ログラムのディレクターを務めている。1995年12月に同研究所に参
加する以前は、博士は英国チェシアにあるゼネカ社（前インベリ
アル化学工業）毒性中央研究所に13年間在籍。その研究所では生
殖発生毒性学主任を務め、化学物質の研究と規制の両分野に関す
る会社の活動のすべての面において責任を持つ立場にあった。研
究分野は、内分泌攪乱化学物質がヒト健康に及ぼす影響の解
明全般にわたっており、精巣毒性のメカニズム、化学物質によ
って早期に引き起こされる精巣ライディッシュ細胞機能不全とそれ
に起因する過形成および腫瘍の研究、構造一活性（発生毒性）関係
研究へのラット全胎児培養技術の応用、発生毒性の誘発に影響す
る毒物動態と動態パラメータなどがある。博士は、その精巣毒性
の業績に対して1988年に欧州毒性学会から若手研究者に対する賞
を授与されており、生殖毒性学と内分泌攪乱化学物質に関する多
くの国内・国際委員会（NTP, NIEHS, EPA, WHO, IPCS,
ECETOC, OECD, INSERM, MRC, NRC/ NAS, SETAC）に尽力
している。また、毒性学や生殖学に関する数多くの学術団体に参
加しており、毒性学会の継続教育委員会の前委員長および生殖発
生毒性学専門部会の現部会長である。現在は、“Reproductive
Toxicology”誌の編集委員と、“Toxicological Sciences”誌の副
編集長を務めている。

長濱 嘉孝

岡崎国立共同研究機構 基礎生物学研究所 教授

1966年 北海道大学水産学部卒業、1968年 北海道大学水産学部修
士号取得（水産学）、1971年 北海道大学水産学部博士号取得（水
産学）。1970～1971年 北海道大学水産学部ポストドクトラルフェ
ロー、1972～1974年 カリフォルニア大学バークレー校動物学教
室 ポストドクトラルフェロー、1974～1975年 プリティッシュコ
ロンビア大学動物学教室 ポストドクトラルフェロー、1976～
1977年 カリフォルニア大学バークレー校動物学教室 リサーチア
シスタントエンドクリノロジスト。1977～1986年 生物化学総合
研究機構基礎生物学研究所 助教授、1996年より現職。

名和田 新

九州大学大学院医学研究院 病態制御内科学（第三内科）教授

1966年3月 九州大学医学部医学科卒業、1967年4月1日 九州大
学医学部第三内科入局、1977年7月～1980年8月 アメリカ合衆
国NIH、NCIに留学、1980年9月1日 九州大学医学部附属病院助
手（第三内科）、1983年4月1日 九州大学医学部附属病院講師
（第三内科）、1988年1月16日 九州大学医学部教授（第三内科）、
2000年4月1日 九州大学大学院医学研究院病態制御内科学（第三
内科）教授。所属学会名及び役職名：日本内科学会（理事）、日
本内分泌学会（理事）、日本糖尿病学会（理事）、日本臨床分子医
学会（理事）、日本内分泌学会ステロイドホルモン分科会（理事）、
日本心血管内分泌代謝学会（理事）、日本遺伝子診療学会（理事）、
日本体質学会（理事）、日本内分泌学会生殖内分泌分科会（理事）、
International Society of Endocrinology（Member of executive
committee）、The American Endocrine Society（Member of
membership committee）。1986年 第59回日本内分泌学会研究奨
励賞受賞。Editor: Clinical Science (England), Internal Medicine
Endocrine Journal/日本内分泌学会雑誌。

中村 將

琉球大学 熱帯生物圏研究センター 教授

1978年 北海道大学博士号取得、1976～2000年 帝京大学 助手 助
教授、2000年より現職。2000年 日本水産学会賞進歩賞受賞。専門
分野：魚類の性分化と性転換、魚類内分泌学。

諸橋 憲一郎

岡崎国立共同研究機構 基礎生物学研究所 発生生物学研究系
教授

1981年3月 九州大学理学部（生物学科）卒業、1981年4月 九州大
学大学院理学研究科（生物学専攻）修士課程入学、1983年3月 九
州大学大学院理学研究科（生物学専攻）修士課程修了、1983年4
月 九州大学大学院理学研究科（生物学専攻）博士課程入学、
1986年3月 九州大学大学院理学研究科（生物学専攻）博士課程修
了。理学博士。1985年10月～1986年3月 日本学術振興会特別研究
員、1986年4月～12月 九州大学理学部生物学科、助手、1987年1
月～1996年11月 九州大学大学院医学系研究科、分子生命科学専
攻、助手、1996年11月～1998年8月 岡崎国立共同研究機構 基礎生
物学研究所 形質統御実験施設 種分化機構第二研究部門 教授、総
合研究大学院大学 生命科学研究科 教授（併任）、1998年9月 岡崎
国立共同研究機構 基礎生物学研究所 発生生物学研究系 細胞分化
研究部門 教授、総合研究大学院大学 生命科学研究科 教授（併任）。
1994年日本生化学会奨励賞受賞。

ダグラス マイケル ストック

米国 テキサス工科大学保健科学センター 細胞生物学・生化学部 Grover E. Murray Distinguished Professor; UMC Endowed Chair; Robert A. Welch Endowed Chair in Biochemistry

1967年 カナダ ウィンザー大学にて科学学士号、1969年 カナダ ウィンザー大学にて科学修士号、1972年 カナダ トロント大学にて博士号取得。1972年～1974年 カリフォルニア大学ロサンゼルス校生物学部にてポストドク課程を修める。テキサス工科大学保健科学センターにて1974～1980年 生化学助手、1980～1990年 生化学助教授、1990～1994年 生化学および分子生物学教授、1994年より細胞生物学および生化学教授、1997年～ Grover E. Murray Distinguished Professor、1998年～ UMC Endowed Chair、2000年～ Robert A. Welch Endowed Chair in Biochemistry。最近の受賞：1985～1990年 NIH Research Career Development Award、1993年 Presidents Academic Achievement Award; TTUHSC、1996～2006年 NIH MERIT Grant Award、1997年 大学科学者の業績に対する報奨 (ARCS) Distinguished Scientist Award for 1997 (ラボック地区)、1997年 Grove E. Murray Distinguished Professorship、1997年 William A. Sadler Lecture、1997年 Society for the Study of Reproduction Research Award for 1997、1998年 UMC Endowed Chair、1999年 British Endocrine Society Transatlantic Lecture Award、2000年 Association for Women in Communications: Headliner Award。

ケネス S. コラック

米国 国立環境保健科学研究所 (NIEHS) 環境疾患と医療プログラムの科学プログラム ディレクター、生殖/発生毒理学研究室 室長、受容体生物学部門 部長

1974年にジョージア医科大学で内分泌学の博士号を取得。ハーバード メディカルスクールにてポストドクトラルの研究を行う。1976年、リサーチトライアングルパークにある国立環境保健科学研究所に入り、エストロゲンホルモンの作用の基礎メカニズムを調査する研究グループの責任者を務め、ホルモン活性を有する環境エストロゲンが生理学的プロセスにどのように影響を与えるのかを解明することに尽力した。このとき、子宮組織におけるホルモン性反応を媒介するエストロゲン受容体の役割についての研究、発生の初期におけるエストロゲン受容体とホルモン性反応の特性の調査、経路を指示する核受容体と成長因子との結合についての報告、エストロゲンの発癌性と毒性の調査、そして様々な遺伝子導入技術を用いた、ホルモンの発癌性と内分泌の調整におけるエストロゲン受容体の役割を評価するためのマウス系の作成などを行なった。ノースカロライナ州立大学生化学部、複数の大学で指導にあたっており、研究の功績に対して様々な賞を受けている。

井上 達

国立医薬品食品衛生研究所 安全性生物試験研究センター 毒性部 部長

1970年 横浜市立大学医学部卒業。1974年 横浜市立大学大学院医学研究科修了、病理学・血液学・放射線生物学を専攻。1975～1983年 東京都老人総合研究所基礎病理部主事研究員。1983～1994年 横浜市立大学医学部助教授。1994～1995年 科学技術庁放射線医学総合研究所生理病理部室長。1995年より国立医薬品食品衛生研究所(国立衛生試験所、当時)安全生物試験研究センター毒性部部長、研究面では特に、トキシコロジーの立場から「ヒト型動物の作製」をはじめとした、種々の遺伝子改変動物の作製、利用、普及などに力を入れている。日本病理学会、日本血液学会、日本基礎老化学会、日本代替法学会等の評議員を務め、日本トキシコロジー学会、日本疾患モデル学会、日本内分泌攪乱化学物質学会等の理事としても活躍している。

ロバート J. カブロック

米国 環境保護庁 (EPA) 国立衛生環境影響研究所 生殖毒性学部門 ディレクター

1977年にマイアミ大学のカシマー クラボウスキー博士の指導の下で生物学の博士号を取得し、11年前よりリサーチトライアングル パークにある環境保護庁国立衛生環境影響研究所の生殖毒性部門のディレクターを務める。研究対象は生殖への有毒転帰に関するリスク評価の開発と改良である。多数の著書があり、この5年間は環境保護庁の内分泌攪乱化学物質研究プログラムにおいて様々な役職に就いていた。Teratology Society会長をはじめ、Society of Toxicologyそして国立公衆衛生研究所のALTX4研究部等、国内外の内分泌攪乱化学物質関係の団体において役員や主要メンバーとして活躍している。現在、デューク大学およびノースカロライナ州立大学でも指導にあたっている。

ロナルド L. メルニック

米国 国立環境保健科学研究所 (NIEHS) Senior Toxicologist

NIEHS計算生物学およびリスク評価室における、毒物動態・生化学モデル作成研究班の班長である。博士は、ラトガーズ大学で修士号を、マサチューセッツ大学で博士号を取得した。カリフォルニア大学パークレー校の生理解剖学科でポストドクター研究員になり、その後、ニューヨーク工科大学の生命科学科の助教授に就任した。NIEHSでは、NTPの毒性・発癌性試験の設計、監視、解釈に従事しながら、環境中および労働現場にある化学物質の機構研究も行っている。メルニック博士は、ホワイトハウス科学技術政策事務局において、健康リスク評価法の統合の作業に1年間従事した。現在は、NIEHSの毒性動態部の部長であり、NTPの発癌性物質報告再検討グループのメンバーを務めている。1996年には、ラムァツィーニ会 (Collegium Ramazzini) の会員に選出された。



ロシエル W. テイル

米国 リサーチトライアングルインスティテュート 生命科学・毒性学センター 研究責任者

1968年、発生遺伝学で博士号を取得。現在、リサーチトライアングル研究所（1989年～現在）で生殖毒性および発生毒性の研究責任者を務める。米国毒物学委員会により専門家として認定されており、著名な専門誌に著者または共著者として50件を超える論文を発表し、書籍では8つの章を担当した。また60件を超える抄録、35件を超える政府報告書を作成した。多くのコースやシンポジウムで講演を行っており、政府および民間の研究グループやピアレビューパネルに参加し、1996年から1998年にはEDSTACのメンバーであった。様々な専門誌の編集委員および原著の審査員を務めており、種々の毒性学組織のメンバーでもある。

ピン C. リー

米国 ウィスコンシン医科大学小児科 教授

小児科、薬理学科、毒物学教授。小児科消化器病学研究室責任者。ウィスコンシン大学ミルウォーキー校 NIEHS海／淡水生物学コアセンター研究員。カナダCF財団、香港Research Grant Councilの外部評議員。NIEHSおよび“内分泌攪乱物質”に関するNTPピアレビューワークショップのパネリスト。米国生化学分子生物学学会、国際生体異物研究学会、毒性学会、米国消化器病学協会、実験生物学実験医学会の会員。研究分野はゼノエストロゲン、特にノニルフェノール類の生殖毒性および内分泌毒性、ゼブラダニオにおけるアルコール毒性、消化管の機能および発達上の変調に伴う新生児低酸素症。

遠山 千春

国立環境研究所 環境健康部 部長

1972年 東京大学医学部保健学科卒業後、ロチェスター大学医学部大学院にてPh.D. (毒性学) を取得。1981年 同研究助手を経て、環境庁 国立公害研究所環境保健部研究員。94年より現職。2000年から筑波大学連携大学院教授（併任）。戦略的基礎研究「内分泌かく乱分野」チームリーダー。ダイオキシン・環境ホルモン、重金属（水銀、カドミウム等）など有害化学物質の毒性発現のメカニズムに関する研究及びそのリスクアセスメントに関する環境保健の広い分野で研究に従事。環境庁等における各種の専門家委員会のメンバー。

ジェームス C. ラム IV

米国 ブラズランド ボック&リー社 BBLサイエンス社グループ 上席副代表

バージニア州レストンにあるBBL サイエンスグループの上席副代表を務める。環境保護庁 (EPA) の殺虫剤および有毒物質に関する副行政官の特別アシスタントを務めると共に、全国毒性学プログラムの受精能と生殖に関する部門の責任者である。ノースカロライナ大学チャペル校で化学士号と病理学博士号を取得し、ノースカロライナセントラル大学法学部にて法学博士号を取得した。National Academy of Sciences (NAS) のリスク評価に関する委員会 (the Committee on Risk Characterization) および環境中のホルモン関連毒物に関する委員会 (the Committee on Hormone-Related Toxicants in the Environment) に参加した経験を有する。

フレデリック S. ヴォンサール

米国 ミズーリ大学 コロンビア校 生物学教授

ミズーリ大学コロンビア校の生物学部で生殖生物学と神経生物学の教授を務める。学士号を取得後、平和部隊に参加してソマリアおよびケニアで生物学を教え、1976年 ラトガース大学にて博士号を取得する。ポストドクトラルでは、テキサス大学オースティン校で生殖生理学を専門とした。国立研究会議の「環境中のホルモン活性を有する物質に関する委員会」に参加しており、米国科学振興協会の研究員でもある。研究分野は天然ホルモンおよび人工内分泌攪乱化学物質に対する胎児期曝露による脳および生殖器の長期的影響である。

江馬 眞

国立医薬品食品衛生研究所 大阪支所 生物試験部第二室長

1970年 大阪府立大学農学部獣医学科卒業、1972年 大阪府立大学大学院農学研究科修士課程修了、1984年 農学博士 (大阪府立大学)、1972年 国立衛生試験所大阪支所勤務、1993年から現職。

ジェームス P. カリヤ

米国 環境保護庁 (EPA) 科学協力政策局 環境科学者

インディアナ大学から環境影響評価でMSESを取得。マサチューセッツ工科大学にて毒性学の卒業特別研修を受ける。米国科学技術会議 (NSTC) の毒物・リスク小委員会の事務局長に就任。米国EPAのリスク解明実行チームの副議長、EPA殺虫剤関係プログラム課食糧リスク評価課の課長、EPAと毒物・疾病登録局との間の毒性情報作成に関する協力連絡担当官。製造前届出 (PMN) と化学物質長期評価に従事した経験もある。

鈴木 継美

東京大学 名誉教授、日本内分泌攪乱化学物質学会 会長

1955年 東京大学医学部医学科 医学士。1960年 東京大学大学院医学博士課程 博士号取得。1968～1971年 東京大学医学部人類生態学教室 助教授。1971～1979年 東北大学医学部公衆衛生学教室 教授。1979～1992年 東京大学医学部人類生態学教室 教授。1992～1996年 国立環境研究所 副所長、所長。日本内分泌攪乱科学物質学会会長を務める。専門分野：人類生態学、公衆衛生学。

酒井 伸一

京都大学 環境保全センター 助教授

1979年 京都大学工学部衛生工学科卒業。1984年 京都大学大学院工学研究科博士課程修了。1989年 工学博士。1984年 京都大学工学部数理工学科助手。1985年 京都大学環境保全センター助手。1995年 京都大学環境保全センター助教授、現在に至る。専門分野は、環境工学、研究分野は残留性化学物質の生成と制御、廃棄物の循環処理方策、有害廃棄物の抑制・制御に関する研究。環境庁、厚生省、通産省の専門委員会委員を務める。廃棄物学会編集委員会編集幹事として、廃棄物学会誌や“Journal of Material Cycles & Waste Management”の編集に携わる。

キャスリーン キャメロン

英国 環境省 (DETR) 課長

毒性学の専門教育を受ける。以前は、保健省および欧州委員会環境総局に所属していた。現在は、英国環境省 (DETR) の Priority Chemicals Branch (重要化学物質対策課) の課長および、Government's Interdepartmental Group on Endocrine Disruptors (内分泌攪乱化学物質に関する政府省庁間グループ) の議長を務める。

金井 雅利

環境庁 環境保健部 環境安全課 環境リスク評価室長

1982年 新潟大学医学部卒業。同年新潟県衛生部。1985年 環境庁環境保健部保健調査室、1990年 厚生省水道環境部計画課課長補佐、1994年 厚生省生活衛生局企画課課長補佐、1996年 佐賀県環境保健部長を経て1999年 環境庁環境保健部環境リスク評価室長。